
ring

kokoro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ring

【Zマーク】

Z7345A

【作者名】

kokoro

【あらすじ】

生きてるから笑う。生きてるから泣く。生きてるから誰かを好きになる。出会ってくれて本当にありがとうございます。

建築士。

それはケンちゃんの夢だった。

そして

私の夢はケンちゃんが設計した家で暮らすこと。

もちろん

「家族」

としてね。

だけど神様は一つも夢を叶えてくれなかつた。

私は幸せになつちゃいけないのかなあ？

私たちが初めて出会った日のことを覚えてる?

それは高校の入学式だったよ。

それで同じクラスになつたんだよね。

だけどあの時の私はまだ、ケンちゃんの存在に気付かなかつたよ。

多分ケンちゃんもそうだつたよね。

入学当初の私には、好きな人がいた。

しかも幼稚園からの片思いで、でももつ既に3回はフラれてた。

諦めようかと思つてたけど、ヤツパそれは無理だつた。

メチャクチャ好きだつたし。

覚えてないと思つけど、結婚する約束した。

絶対覚えてないよね~?

だけどあの時は信じてたよ。

いつかどこかでりゅーくんと再会して、10年前の約束果たすんだつて。

私、幸せになれるんだって。そう信じ込んでた。

あの人に出逢うまでは。

「若菜つて好きな人いる？？」

入学して初めてできた友達

「佐野涼風」

（さのすずか）が私に尋ねた。

「はあ…まあ。無理だけどねッ」

「ねえ、どんな人？？！」

「教えなーい。」

「冷たいなあ…。」

「教えてほしーい？？」

「教えて！教えて！」

りゅーくん」と

「中村隆太」

に出会ったのは、今から20年も昔の幼稚園の年中のとき。

私が確か5歳だったかな。

1つ下の年小クラスに入ってきた中村隆太に一目惚れしたのです。

それからと言つもの。

私たちは田が経つにつれ次第にお互いの距離を縮めていき、最終的には先生公認の仲にまで発展していました。

「若菜ちゃん、隆太くんと仲良しですねえ。」

「だつて僕たち結婚するもん！」

5歳ながらにそれは重たい言葉だつたけど、その時はその時でホントに幸せだつたと思うなあ。

それから小学校、中学校とりゅーくんと同じ学校に通つことになつた。

学年が違つて、お互いに時間的な距離とか環境の変化もあつたが、それでもりゅーくんに対する私の想いは変わることがなかつた。

ずっと好きだつた。

「彼女ができた！」

「よかつたじやんー幸せになりなやこよ？」

「当たり前やしー。」

私たちが長年に渡つて育ててきたもの。

それは恋愛対象の愛ではなく、兄弟や家族と言つた強い絆で結ばれた愛だった。

中2の時、りゅーくんに彼女ができる初めて気付いた。

夢は夢のままのかな~つて…。

私が姉で、りゅーくんは弟。

それでもよかつた。

関係を崩したなかつたから

「実はずつと好きだったのよ。」

なんて言えなかつたし。

もの分かりのいい弟だから、こいつかこのどちらかよつもない姉の気持

ちにも気付いてくれる。

そう信じて現実から逃げてた。

「バイバイ」

中学の卒業式、可愛い彼女の横で私に手を振ってくれたりゅーくん。

あの日の姿を目に激しく焼き付けたまま迎えた、高校の入学式。

もつりゅーくんには会えないんだね。

毎日は会えないんだね。

希望とか期待は全部ブルーな気持ちに還元された。

ただ大好きな人に会えないってだけで。

だから…。

「私は、可愛いくて猿っぽくて…ワガママで。だけどシックカリして
るし、真面目な人が好きなんかない。」

「違うクラス?????」

「は?」

寝ても覚めても頭の中はりゅーくんのことでイッパイで、クラスの男子なんか全然目に入らないって感じだつた。

冷静に見ると周りの積極的な子はケッコー男女で親睦を深めてるし、終わつた恋、始まつた恋、それぞれに色々な事情があるらしい。

私はそこで既に手遅れつていうか、時代遅れつていうか…。

ま、それでよかつたけどね。

だけど…。

「私ね、クラスで気になる人がいるの。」

涼風もまた時代の先駆者だつた。

「え…？ そうなん。」

「何、悲しそうな顔してんのよ~。」

「別にそういう訳じゃなくてね…。」

「じゃあ誰だと思つ?」

「うーん…。顔と名前が一致しない。」

「若菜、いくら男子に興味ないからって名前覚えないのはよくないよ。」

「あ～一西岡くんだ……」

「バカツ……」

「！」の私に答えるやうとするのがまづ無謀だよ～。」

「木村憲吾くん。」

「ええ？？？……？… ってマヂモウ もうらくん… なん？！」

「何？！ヤバかつた？？」

「う…うん、かなりヤバイと思つ…」

「どーいつ意味で？」

「考え直した方がいいとかで…。」

とこづか…友達のこの発言を元に初めてケンちゃんの存在を知った、認めた…んかなあ。

それまで意識することはなかつたけど、それから一ヶ月半は、私が持つケンちゃんの悪いイメージは消えなかつた。

入学して翌日から始まつた授業。

地理B。

私も眠かつたよ。

国語総合。

作文用紙破つたよ。

数学。

意味不明だつたよ。

だけど君、初日から怒られてたよね。

1限目から爆睡してて、2・3・4とたまに起きててもダラダラしてて。

揚句の果てには

「木村、姿勢が悪い。」

とかつて言われて立たされてた。

どれ程問題児なんかと思いました。

茶髪だし、シャツは半分出してるし、授業に集中しない。

「いやダメよ。

学校来る意味ないわ、とか正直思つてた。

けど、実際違つたよね。

髪は白毛で茶色くて。

部活はメンドーだから入つても行つてない。
だけどバイトもしていないし、遊ばない。

実は大学行きたくて勉強を一応してる。

運動はケツコ一好き。

今まで誰とも付き合つたことがない。

強がる彼の背中が日に日に弱々しく見え、思わず優しささえも想像してしまった。

決して後ろは向かないけど、授業中にせしそうに漫画を読むケンちゃんの姿見てるの好きだった。

授業終了の10分くらい前になつてノートを必死になつてまとめる姿とか見てて楽しかつた。

幸せだつたな。

不思議な夢を見た。

これを機に胸の中にあるこの気持ちが、恋愛感情であるとこつ事実を否定できなくなつた。

私、この人のこと好きなんだ……。

あまりに唐突すぎて胸が苦しかつた。

「不思議な夢見たよ。」

昼休み。

涼風との会話の中で。

「何? 何?」

「しかも涼風出てきたよ。」

「えーマジやつたじやん……。」

「木村くんと一緒にだよ。」

「はー?」

「恋人同士だつたし。」

「なんか嬉しいねー、でも私には先輩いるしね。」

そりや嬉しいでしょ。

だけど木村くんが気になるとか言いつつ結局バスケ部の先輩と付き合つ友達。

世の中つて矛盾だらけだよね。

でも私はその事実に救われたけど。

「俺はオマエの味方だから。」

そんなキザなセリフ似合わないけど、夢の中のケンちゃんが言つてたよ。
涼風に。

だけど笑顔は本物だつたね。

笑った顔好きよ。

ケンちゃんには笑顔が一番似合つよね。

だからズット笑つてほしかったよ。

「三角形ABCにおける斜辺の長さを \equiv 平方の定理を用いて求めなさい。では西園。」

一瞬田が合つたけど先生は後ろの席に座る西園くんを向いた。

5限田はどんなに努力しても勝手に田は閉じよつとすゐし、7月になると蒸し暑さで集中できない。

楽しくない。

ぼーっと黒板に書かれた三角形を眺める。

斜め前の席に座るケンちゃんの姿が自然に田に入る。

今日もまた漫画読んでる。

この人の世界は平和なんだろね。

西園くんは問題に答えられず先生に怒られてるし。

頭はメチャクチャいいはずなのにおかしいなー。

運命の瞬間まで

3

2

1

0

一瞬世界が揺らいだ。

私の田の中に入ったのは背中じゃなくケンちゃん自身。

田と田が合つて沈黙の間に時間だけが淡々と過ぎた。

田を逸うりやつともやうぢやず何も考えないままに、ケンちゃんを見つめていた。

西岡くんが口を開いた瞬間、夢が覚めて急に恥ずかしくなったためかノートに視線を落とし何かを書く姿勢を取り直した。

その時は多分、心も体も震えてどんな感情も形として表現できなかつた。

こんな気持ち初めてだつたよ。

ホントにケンちゃん変わつたよ。

「木村は穏やかになつたよな。」

小、中と木村くんと同じ学校だった西岡くんが言つてた。

私もそれは思つた。

だって笑ってるもん。

私が大好きな笑顔で笑ってくれてたから。

目が覚めると朝だった。

鏡を見ると目が腫れてて痛かった。

そう。

私、夢の中で泣いてたんだね。

キットそうだね。

些細なことで喧嘩して飛び出したケンちゃんの家。

私たちは出会ってから3年目でようやく付き合い始め、2回生の時から同棲を始めた。

今は4回生とこいつとでお互い就職のことなどでギスギスしていたりする。

だからぶつかつてもしょうがないよね。

素直じゃないから、謝れなかつた。

一方的に怒つてホントにゴメンね。

3日間、友達の家に泊まらせてもらつた。

ケンちゃんとは同じ大学だけど、学部も違うし通う時間も違う。

ケンちゃんが大学で勉強してる時間帯は、寝ているかバイトか論文制作かサークルか…。

最近は学校図書館教諭の免許の資格試験の勉強を始めた。

ケンちゃんは相変わらず建築士になることを夢見て連日連夜、試験勉強に勤しんでいる。

大学帰り道にお惣菜屋さんがあるんだけど、授業が終わって10時頃にそこへ行くとオバチャン負けてくれるんだよね。

オーギリとか唐揚げとかギョーザとかイッパイあるけど一番はヤツバ、コロッケでしょ！

そして帰つてからケンちゃんの部屋に忍び込んで、後ろからギュッて抱きしめる。

そしたらケンちゃんはおかえりのキスをしてくれる。

キスの後にケンちゃんは

「何の匂い？」

つてね、嬉しそうに私に問い合わせるんだ。

ケンちゃんと一緒に食べるクロッカはとてもおいしいよ。

ケンちゃんがおいしそうに食べる顔、メチャクチャかわいいよ。

「毎日は太るからダメだけど、たまにこーいつ時間は大切だよね。」

「俺は、たまにだけこんな風に若菜と一緒におれる時間がチョ一幸せで、それだけでお腹イッパイかな？」

「恥ずかしいよーー！」

「だつて俺、最近友だちから『太ったんじゃねー?』って言われるのに。絶対幸せ太りだよな。若菜のせいだぞ。」

「私も最近『キレイになつたねー』とかよく言われるよ。ていうかケンちゃんのせいで私だつて苦労してるよ。」

ケンちゃんの横を歩いても不自然にならないように頑張ってる。

ケンちゃんに飽きられないようになりたいんだもん！

「他のヤツにくついてたら俺マジ許さねーから。」

一応大事にされてる。

だつて私彼女だもんね。

だけど私は、彼のキモチを全く分かつてなかつた。

恋人、彼女っていうスゴク近い関係だったのに…。彼の悲しみ、孤
独。

そして過去。

そうかな、ヤツパ私にはケンちゃんと一緒にいる資格ないのかな。

ヤツパ幸せになれないんだね。

こういう結末、神様は全部知つてたの???

「オハシ、1つでいいです。」

「あらそう、『めんなさいね』。いつも2つ入れてるからついくせて。」

「いえいえ、ていうかもう必要ないのかな。」

彼と別れました。

てか彼が死んじゃいました。

……だなんて自分が受け入れられないこと、世間が受け入れられるハズがないよね。

「暫く……てか何年かしたらまたオハシ……2つ要るようになるかな。」

何言つてるんだろう。

私。

ケンちゃんが存在しなくて世界は何も変わらない。

憎こほど色や形を変えないで乱れず呼吸してる。

歩道橋の下を流れる車や、駅を歩くスース、いつものお惣菜屋さん。

空の色。

匂い。

音。

何も変わらない。

変わってしまったもの。

君の存在が消えたことかな。

ドアを開けた。

玄関にはケンちゃんの靴が脱ぎ捨てられたまま。

だけど光りはない。

「ただいま。」

ケンちゃんの部屋を覗いた。

もひ何年も不在だね。

リビングに向かい冷蔵庫から空ビールを2缶取り出した。

いつものプロッケ。

口に含むひじまじょつぱくなつてた。

もうダメかもしない。

私は眠ってしまった。

夢の中で泣いてた。

現実だつて苦しいのに、私には居場所がない。

ケンちゃんのトコに行きたいよ。

「やつぱつオマジかいないんだ、俺には若菜が必要なんだよー。」

あの時の言葉信じてよかったの？

私たちがすれ違い始めた22歳の秋。

私はバイトを辞め資格試験の勉強に没頭した。

だから家にいる時間が長くなつたのにも関わらず、ケンちゃんは外出することが多かった。

時々帰つて来ない日もあった。

前もそんなことがあった。

だけどあの時は、私の誕生日プレゼントのために学校も忙しいのを寝る間も惜しんで働いてくれてたんだよね。

そんなこと知らずにこいつに当たっちゃった。

それで家飛び出したんだつけ。

それってスゴク勝手だよね。

「帰つてきてくれ。若菜がいないと俺ダメになっちゃう。」

「ホントに? 私…ケンちゃんに迷惑とられてるの?」

「うん。 てかメチャクチャ愛してる。世界で一番愛してる。」

そんなキザな言葉、出合つた頃のケンちゃんからは想像できなかつた。

「中谷さん？」

背後から聞き覚えのない声が私の名を読んだ。

振り返ると確かにそこには木村くんがいた。

夢かなあ……私は見て見ぬ振りをして再び前に向き直し歩いてみた。

「中谷さん……俺呼んだんだけどな、名前。」

はつとして振り返ると木村くんは笑っていた。

しかも満面の笑みで。

「『』めんなさい。……えと中谷です。木村くん、何か用？」

奮えてた。

心臓も。

声も。

体も。

全てが。

「んー。いや……ただズット話したいなって思つてたから……。」

「不思議～。」

「何が?...」

「だつて木村くんみたいな人が私と話したいなんて……。何か間違つてるかな、夢かと思つ……。」

そう、夢だと思った。

てこうか夢であつてほしかつた。

出会いも全部始めから夢だつたらよかつた。

「ましてや木村くんがさ、モテモテの木村くんがクラスでも目立たない私みたいな子に話しかけるなんて有り得えない。」

「君のファンが世界でたったひとり、俺だけだつたらいいなーって毎晩祈つてた。」

「信じてくれなくていいよ？」

私は何も言えなかつた。

始めてのメール。

ドキドキしながらケー・タイ握つた、1学期最後の日。

「明日から夏休みだー！」

そつか…夏かあ。

「中谷さんつて夏休み予定ある?..」

「特になし。」

即答だつた。

「じゃあ、遊ばない?」

「は?..」

「だから遊ぼうよ..」

「木村くんつてB型?」

だから君、予測不能だよ。ウチの親父そいつ。

「何で?俺Aだけど?」

「意外だね..」

「中谷さん絶対Bでしょ?」

「フツーにAだけど。」

「やーなんだ」

意外に私って冷血だつたりするね。
すつごい意外だけどね。

冷血以上にマイペースだよね。

流されるままに時間は過ぎてって結局私たちのは8月のある日、友達とケンカしたと遊ぶことになった。

予想だにしない出来事だった。

背中に恋してた日からあまり時間は経過していない。

彼は追い掛けば追い掛けるほど遠くなつてくような気がしてたから。

だから。

こんなタナボタ的ないい話が簡単に成立していいものかと冷静に考えるこつもあつた。

あの時は何も考えなかつたから幸せだったんだよ。

楽しかつたんだよ。

ケンちゃんも傍にいたから。

私は何も恐くなかったよ。

「煌ちゃん」

奥本煌は同じクラスの仲良しさんだった。

「ねーねーーどういづいとなの? これって何か仕組まれてるとか? ?」

警戒心丸出しの私とは打って変わりオープンなのはキラリン。

「キラはいいと思うよ~ てかホントに実現するとか有り得ないと
思つたし、ホント若菜ありがと!」

何だろ?…。

別に頼まれてやつた訳じゃないけど…。

ケツコー前にね~、

「キラリンー私木村くんのアドレスGeetしたよ!ー!ー!」

「やつたじゃん~! ! てかどうやつて聞いたの?」

「てか本人が教えてくれた。」

「何やつてんのー。ナンパされてんじゃん!両想い確定じゃん!ヒ
ューヒューーーー!」

キラリンのトーンショーンの高さにはついてけない…時もあるよ。

楽しいけどね！笑

「キラリンはどうなの？」

「私はもういいよ。」

「何で諦めんのよー一緒にがんばりやつたじゃんー。」

キラリンには好きな人がいた。

同じクラスの大野伸也（シンヤ）だった。

「ダメよーーもう。大野くん彼女いるよ。。。」

「聞いてみよっか？」

「ふえ？！」

「木村くんに聞いてみてあげる。」

そして彼はケンちゃんの友達でもあった。

楽しいはずの時間。

こんな悲劇が待つてると知つてたらあんな場所には行かなかつた。

だけどあの悲劇が私たちの絆を深めたんだよね。

そして一生に残る傷が心に深く刻まれた。

「じゃあ、俺と中谷さんとキラちゃんとシンで4人な！花火大会しよなッ！来週の月曜、5時に俺ん家集合！－！－！」

「チョット…？！」

「シンにはメールしとくから中谷さんはキラちゃんに連絡よろしくね！」

電話が切れた…。

ケンちゃんの強引なトコには誰一人として歯が立たないだろうね。

キラリン喜ぶかなあ。

メールした。

『がんばろっと 大野くんと仲良くなんなきやー!』

電話の声は明るかつた。てか明るく振る舞つた。

だけど心は奮えてた。

冷たがつた

痛が
た

・キラちゃん

私の名前は何故呼んでくれないの？

なかたにサンじゃないよ。

私は、ワカラだよ。

なんか恐かつた。

受話器を持つ手が奮えてた。

8月2日。.

明日は、地方のお祭りの日でもあるんだね。

「若菜～アンタ明日お祭り行かないのぉ？！」

母の声がする。

何か問い合わせてる。

『行かない～友達と遊ぶ約束あるからあ。

高校1年の私はそう返して家を出た。

でも今は違う。

「行かない～。だつてメンドーだし。」

「せつか帰つてきたつてこいつにアンタは家に閉じこもつた。
もつたといないわよ？」

「だつて…。」

「あ、そうそう。ちょっとこれ持つてほしいのよ、りゅーくんのと。スイカなんだけど今日、茉莉加たちが遊びで翻つてね~。」

「りゅーくん…。」

りゅーくん（中村隆太）は私の家の隣の隣だった。

近所つてことで親同士の仲もいい。

昔は子ども同士で仲がよかつた。

昔はね。

今は、卒業式以来会つてないからどうなつてるとか知らないけど…。

元氣でいるといいけどな。

幸せであつてほし~よ。

中村家のインターホンを押し、ドアを開けよつとしたその時、聞き覚えのある声が私を呼んだ。

「わかちやん？」

その名前で私の名前を呼ぶのは世界でたった一人。

りゅーくんだけ。

りゅーくんだけその権利を『えられてた。

私はドギマギしながらも必死に溢れる感情を押さえていた。

胸が締め付けられるよいで苦しい。

過去と現在が交錯する。

真っ白……。

「久しぶり? 元気にしてた?」

「今日は浴衣じゃないの?」

「え?...」

「彼氏に会いに行かないの?」

「何書いてるの?」

私は地面にスイカを落とした反動で走り出した。

時を駆けた。

空間を通り過ぎた。

現実を遠ざけた。

ま、頼はどこの偉いさんになつてゐるかしらないけど...。

お陰で私の記憶が書き換えられてしまつたよ。

『わかちやん?』

『じゅーくん！お久ー。』

『いれからお祭り。』

『いっさん、今田は遠出してへるー。』

田舎に住んでた私は、市内の中心街の学校に通うため親戚の家に下宿していた。

夏休みになつたので、実家に帰つてマジタリしてたけど。

『そつか…なかなか似合つてゐよ。』

昼間から浴衣で歩く人はそつは居ないだひつ。

『ありがとう。これからデートなんだ。喜んでくれるかな？』

『もううん。』

その時、本当に私たちの関係にピリオドが打たれたんだ。

だけど、そんなこと。

すっかり忘れてたよ、りゅーくん。

思い出してしまったね。

8月2日。

「おまたせ～中谷さん！待つた？？？」

「二人共ちこくーーー！美女2人待たせて 一体どうこうつもつよ？？」

「ホントにごめんね！」

「大体ケンがよ？」「イツ服一つ選ぶのに3時間かかったんだぜ！？

「オマエ、人のコトいえねーだろ！？髪セツトするんに1時間…。
ナルシスト～。」

よく見るとみんな髪の色が明るくなつてゐる。その効果もあつてテンションもかなり高い。

相変わらず私は低い。

だから弾む会話の隅つこりで静かに傍聴してゐる。

なんかのドラマ見てる気分…。

また置いてけぼりだよ。

こつも、こつも。

「ねえ? 中谷さん? ー。」

ケンちゃんが氣を遣つて話を振つてくれたりしてた。

「…うん。」

だけどつこつけない。

「どうしたの？元気ないよ？」

キラリンの優しさが痛い。

不器用すぎるよね…。

「え…うん、まあ緊張してるのかな。」

この胸の高鳴りは緊張とは違う。

不安の陰でもない。

胸騒ぎがする。

これって…すりて悪いことが起きる前兆なのかも。

あの時、帰ればよかつたんだ。

「浴衣、すゞしく似合つてるよ。」

「そう?生まれて初めてきたんだけど…。」

「来てくれて嬉しかった。」

「えー?」

「だつて絶対来てくれねーつて思つてたもん。あんな強引だつたら。

「そういうトコに揺れる人もいると思うよ。例えば私みたいな。」

「そうだね、中谷さんの冷たいけど…優しいトコに射止められる人もいるよ。例えば俺みたいな。」

ケンちゃんは思つたよつて言葉に慎重で丁寧な表現をする人だと思った。

感情が深くて、優しさを感じる。

もっと深いところにはやっぱりある場所があるのかな。

あつたかそうだな。

ケンちゃんの心の中で私の居場所はあったのかなあ……。

私はシャントあるよ。

そうだね、こいつでも帰つていれたまうキライにしておくな。

ケンちゃんの部屋。

「俺、中谷さんの射る『』になりたいわ。」

「木村くんも何か部活しなよー? 絶対暇じやん?」

「つー暇。暇すぎるー。」

「でもバイトははじめるでしょ?」

「え? してない?」

「じゃあ塾?」

「一応、登山部。」

「ヒガルん! 一応なんあるのねー? はー初めて知ったー。」

「で、こいつが一回も参加していないかな。」

「じゃあ『道はない方がいいよ。先生恐いし。』

「そうだね……。てか部活ってフツーにタルいしか。」

「やつへやつてみるとケツ ハー 楽しけやー。」

「でも俺バスケは最高に好きかな。」

いやん！ 私バスケ超苦手だからできるの羨ましいよ

中学の時は何か部活やってた？

「一 講文」

「マサニ！？」

『ホントはモツト前から私たち出会つてたのかもしれないね。』

神様は私たちが会うこと知つてたのかなあ？

神様なら運命とかつて変えれるのかなあ？

こんなに強く結びつけといて突然引き離そうとするなんてあんまり
だよ。

傍にいたい。

傍にいてほしい。

どこにもいかないで。

消えないで。

失くならないで。

お願い…。

「若菜ちゃん、ケンとまじーなの?」

いつの間にか隣に大野くんが座っていた。

私は遠くで弾ける花火の行方を切なげに目で追っていた。

花火みたいに打ち上げられて燃えて、激しく散る…恋。

最初に想像してたのはそんな恋だつたけど…。

「上手く行つてるのは分からない。だけど私は確実に惹かれてるよ、木村くんに…。」

「そ、うなんだ…。」

余韻を残すような眼差し。

行き場を失つた言葉…。

まるでさつきまでの彼の面影は消え去り、目の前にいるのが全く別の人間にさえ思えた。

「大野くんはどうなの？」

パンツ！

花火の弾ける音。

心の弾けた音。

心の悲鳴。

「俺じゃダメなの？」

「え？！」

視界全体に大野の顔が拡がった。

背中には地面の冷たさと、首筋に土のザラザラ感と、心には悲しみ
と。

ただそれだけが胸の奥をまわぐつた。

口は塞がれ、手足の自由が奪われた。

もうダメかと思った。

目を閉じた。

ごめんね。

そう呟いた瞬間、柔らかなものが私の唇に覆いかぶさった。

体が震えた。

この変な感じ……。

ファーストキスは好きな人とつて決めてたのに。

一筋の涙が零れた。

彼は、腕を振りほどき私を乱暴に引き離した。

私はゆっくりと起き上がり大野くんを睨みつけた。

「アイツ……族どつるんでる、ケツマー悪い奴なんだぜ。見てみろよ。

」

指さした先、確かにケンちゃんの姿があった。

バイクの集団の長らしい人物と何やら親しげに話していた。

その光景が何とも異質的に映り、見ているだけで胸が痛くなつた。

「ウソ……。」

「嘘じゃねーよ。」

「だったらこれは何？」

「現実。てかアイツ親いねーから、ひねくれたって聞いたけど? あーいうのに限って意外に派手な事やつちゃうんだよな?。」

「大嫌い!」

「アイツじゃ若菜ちゃんを幸せにできねーわ。」

「大嫌い!大嫌い!ーーー!」

逃げだしたかつた。

とにかく息苦しいこの場所から逃げたかった。

苦しいことも悲しいことも全部忘れられたら。

水に溶けてドツカ遠くに流れてしまえばいいのに。

全てが永遠になっちゃえればいいの!!。

唇は熱を孕んでた。

燃えるような心と。

花火みたいに散る恋。

ヤツパ想像した通りじゃん。

私は幸せになれないの？？？

あれから円日は流れた。

何事もなかつたかのよつに過ぎ去つた夏休み。

いろんなことあつたけど結局ミンナ最後は笑顔になるんだね。

笑顔…。

「キラリンー」

「…。」

田が合つたのに、完全に無視された。

夏祭りの日から会つてないし、連絡も取り合つてない。

体育館で始業式を終えた後、HRまで時間があつたのでトイレに行つた。

「若菜、夏休みなんか楽しいことあつた？？」

「うーん、あつたようななかつたような…。涼風はどうなの？」

クラスで一番の友達、佐野涼風だ。

「どうつて…部活ばつかで結局お盆しか休めなかつたし。」

「いや…バレーの先輩とは…まあ部活も大変だらうけど。」

「一回一緒に帰つたくらいかな…後はもう何もない。」

何だ、みんなそれぞれErijoyしてゐるじやん。

笑いのある日常。

普通すぎるけど超幸せ。

涼風と過ごす時間、超楽しい。

一番素でおれる。

だけど…風は通り過ぎていった。

淋し気な眼差しと鋭い視線が私の心を擦り切った。

冷たい。

アイツの笑顔…

冷めた笑顔…。

取り返しのつかない。

戻せない時間たち。

「大野くんじやん」

ついでに涼風と同じ部活だっけ…。

「奥本さん?」

隣にケンちゃんはいなかつた。いつもは一緒に居るのにね。
なんか変だなあ…。

「チヨット…俺のこと忘れないでよおー涼風ちゃん

「うわッ! キモい!」

話しに割り込んできた大野くんの友達。

その人絡みの人物はミンナ汚れたように感じられる。

あの時以来、印象はガラリと変わってしまった。

汚い笑顔。

そんな醜いものばら撒かないでくれ。

もつこらなー。

凍った瞳で彼を睨みつけてその場を立ち去りつとした。

マイペースな涼風は完全にお喋りの世界に没入してしまった。

私は、そんな涼風を置いて教室に向かおうとした。

足音がある。

涼風だと思った足音が、私の足元の一歩手前で止まった。

それと同時に、もつと遠くから涼風の笑い声が甲高く響いた。

『バカきょーすけ！』

私は無意識に立ち止まつた。

振り返りつとした瞬間悪魔が私の名前を呼んだ。

「若菜ちゃん？」

「一体何なの？！私、許さないから。」

「ホントにそれでいいの？秘密バラしちやつていいの？」

「何のこと？』

わざと知らないフリをした。

そんなの弱い人間がやることだつて思ったから。

バカバカしい。

「恐くない？」

「恐くないよ。」

「さすが勇敢だね。そういうまますます惚れちゃつかも。」

「アンタみたいなクズ、一生恋できぬい体になっちゃえばいい。それだったら誰も傷つかないで済む。」

そう、人を愛する資格さえない。

もちろん幸せにする資格もね。

「なんならそれ木村に言えよ。木村には若菜ちゃんを幸せにできない。今からでも遅くないから来いよ、俺とトコ。」

「アンタに恋すんなら死んだ方がマシー。」

抱かれる人は哀しいね。

そう言い残すと私は背を向け再び進み始めた。

しかし視線の先にはキラリンがいた。

私の方へ近寄つてくる。

高まる胸の鼓動。

震える足取り。

無言のまま通り過ぎた。

俯いた顔、初めて見た。

悲しそうな目をしてた。

キラリンは大野くんとも一言も交わさずすれ違つていった。

3人の3つの時間が過ぎた。

ヤツパみんなそれぞれ違つことを考えていたんだろうね。

じゃなかつたら…。

こんなの必要ない。

私は悲しかった。

苦しかった。

潰れそうだよ。

涼風がいなきや、ケンちゃんがいなきや。

ホントは弱いんだね、私。

「 もう大野くんと関わってほしくないんだ。」

「 なんで？」

ホントは知つてたくせに。

みんな知つてたくせに。

なのになんで？

何で黙つてたの？

翌日。

不機嫌ながらわざと遅刻して行つた。

私はB組だったのでA組の前だけはどうしても通ることになる。

いつもはためらいなんかなかつたのに。

なんかスゴク恐い。

でもやつぱり…。

「アイツB組の。」

「中谷若菜？」

「マヂきもー…ようあんなんがやるよなあ。」

大変な奴を敵に回してしまったんだ。

ドッカで私の噂が流れてる。

知らないけど何かの噂。

非通知の着信。

脅迫メール。

私を苦しめた。

消えてしまいたい。

私は一人だった。

「アイツ人の男取つて、フツーに学校来るとかマヂありえねーから。
ブツ殺したい。」

キラリンの声が耳の奥で響いた。

隣のクラスのはずなのに。

机の上には『死ね』の文字が刻まれてた。

私は、居場所がない。

目に涙を貯めたまま教室を飛び出した。

ドアのところで誰かにぶつかった。

「『めん』

「あー若菜？おはよ！朝来てなかつたけど大丈夫？？？」
涼風だつた。

『んな奴ほつときやいーんだよ。』

憎い。

「う……」

「ちよつー若菜どー行くのよー。」

私を呼ぶ涼風の声が最後まで聞こえた。

遠くに逃げても涼風の声だけが頭から離れなかつた。

苦しい。

辛い。

何で？？？

涼風から電話。

「もしもし……」

「若菜？アンタ大丈夫？」

「大丈夫じゃないかも。」

「ていつか今、どこにいるの?」

「屋上。」

「今すぐ行くから待つて。」

「うん。」

「絶対待つて。」

うん。

空がキレイだと、初めてキレイだと感じた。

目をつぶつて風を感じてた。

音を追い掛けた。

誰を待つていた。

階段を駆け上がる軽快な足音。

久々に心に光りが燈つた。

「若菜！心配したじゃん！何でアンタをいつつもいづ… 一人で抱え
こもうとすんの？！私が…私がいるのに…！…！頼つてよ…？悲し
いじゃん…！」

涼風は泣いていた。

今まで押し留めていた感情が一気に溢れだした。

堤防が決壊した。

「すずかあ…！」

私は思わず涼風に抱き付いてしまった。

そして子どもみたいに大声を張り上げわんわん泣いた。

「辛かつたでしょ？ホントによく頑張ったよ。でもこれからは、い
つも一緒にいるからね。私が守るからね。」

「うん。」

「だから泣かないで？若菜には笑った顔が一番似合つよ。」

優しい涙を見た。

ていうか人ために流す涙はキレイだね。

誰かのために笑うって嬉しいことだよね。

涼風がいてくれてよかったです。

ホントによかったです。

心からそう思ひ。

涼風にとつても私が大切な存在であつてほしい。

初めてそんなこと考えた。

サッカー部の大野信也は学年でも10番以内に入るくらいモテてい

た。

ソイツは私と同じクラスだった。

ケンちゃんも一緒だった。

隣のクラスの奥本煌^{キラリン}は大野を狙つてて、私がケンちゃんと親しくなつてから私たちの友情も深まつていった。

「4人で花火しない?」

断つておけばよかつた。

やつしておけば今更にことにはならなかつたのに…。

あの時のキス…。

写真が出回つてた。

押し倒されたのは私なのに私が押し倒して強引にした形になっていた。

変なトコでコンピュータ技術は進化している。

ヤコマン 中谷若菜。

初めて人を殺したいと思った。

初めて。

「こんなコト弱いがやる」とよ。無視つときやいい、それか笑いと
ばせばいい。」

前向きな涼風の言葉で私の心は救われた。

ホントにありがとう。

出会ってくれてホントにありがとう。

「例の事件、犯人やっぱ大野だった。アイツ停学だつて。ちなみに俺もだけど。」

事件から一周間後、

犯人が大野だと言うことが流れてきて、学校中の噂になつてた。

涼風もバレー部のキャプテンから聞いてその噂が流れる3日くらい前に知つたという。

私は、ありもしない噂を流されながらも1日経つたら平然としてた。

ケンちゃんだつて知つて普通に振る舞つてくれた。

挨拶もしてくれた。

けどお互いがすれ違うこと多くなったよね。

そんなの気にしない。

だって信じてるし。

それに私には涼風がいてくれるもん。

私の世界から涼風が消えない限り笑うこと忘れないとひづな。

涼風は人をハッピーにしてくれる。

不思議だね。

ホントにそんな人いるんだ。

天使みたい。

「天使みたい。」

「何言つちやつてんの。」

「私幸せ者だね。」

沢山の人に支えられてた。

ずっと一人だと思つてたのに。

「木村くんかつこよかつたよ。」

「ん…？」

「『今度、俺の女傷つけたら許さねえ、ブツ殺す』だつて…私もそ
んな言葉言われてみたいし。」

「涼風だつて言つてもらえるよー先輩がいるじやんーーーー！」

「あんなへ口へ口くんが言つはすないじやーん。」

へ口へ口くん…。

ホントに好きなんだ。

大好きなんだよ。

ケンちゃんのコト大好きだから。

このキモチ誰にも負けないから。

絶対負けないから。

「若菜！」

「キラリンー？」

「一緒に帰つていい？」

「いいよ。」

「「」めんね。」

「え?..」

「疑つたつして「」めんね。」

「何で謝るの?..ウチから友達じやん?」

「わ”がなあーあ..。」

「ちよつとま、キラリン鼻水つくじやん。」

「だつてえ..。」

キラリンと私は仲直りした。

「若菜はーいよ、あんなに愛されてて羨ましい。」

「そんな...愛されるとかないよ。」

「てか、木村くん行くつてみてみない!..?」

「は?..」

「謹慎中だし罷りしよ、ビーカ。」

さすがキラーン、君には勝てないよ。

「イキナリ迷惑じゃない！？」

「考へえすがよーー..逆に歓迎してくれるつで」

「でも…。」

「私回り中学生だったんだから家分かるし、昔よく遊んだしね」

確かにやつだナビ…。

怒らないかなあ、

ピンポン。

ガチヤツ。

おかあさん！・！・！

「煌ちゃん！？久しぶり～！お母さん元気にしてる？」

「どうか元気すぎてヤバイ！ 私より長く生きそうな勢いよ！」

「あらやう。それはジズロさんらしいわ。お兄ちゃんは、大学生よね？？」

「だつて洋介くんと同じ歳じゃん！」

「そつかあ」。

「そっかあ～っておばちゃん！相変わらずマイペースなんだから。」

「でもホントに久々だからびっくりしたのよー。随分大人になつて。」

「お世辞なんかいらなによー。まひとつくけど向も出てこないからね」

「あらー…。とつあえず入つてよ。」

「じゃあお皿葉にせえで…。」

キラリンが進んでつて、私はケンちゃんのお母さんと皿があつたので軽く会釈した。

よく見ると綺麗で、ケンちゃんと同じ。

優しい皿をしてる。

小さくて垂れ皿で

優しい皿。

「うそだよ。」

「うんにちがう。あなたも来てくださいたのね。嬉しいわ。」

「違つよ、おまけやん若菜さん……何てこいつか。」

「キラソン！」

「いや。何でもないですわ。とりあえず入りなよ、若菜。」

「煌ちゃんは昔から変わつてないわね。」

「少しば大人にならないといけないよね。」

「変わらぬことが一番いいじゃん。」

「まあ、お一人さん入って。

『おじさまつめーす!』

「慧那さん！お友達が来てくださいましたわよ。」

- あー？！

お友達！！！」

「せー? 悪いけどソラ ハー歸つてもいいでー。」

「チョットお茶入れるからその間に片付けなさいよ、部屋ー。」

「だから帰れって。」

「煌ちゃんたちとつあえずリビング入って。」

「はーー。」

「てかいいのかな、嫌がってるじ。」

「ま、いいんじゃねー!？」

「あの子嬉しがってるのよ。」

「ですよねー?」んな美女一人がね!」

「ホント恥ずかしがりなトコと頑固なトコせお父さんもつべり。」

「でもマイペースなどこのまほほんばかりもつべり。ていうかチョットケン!」の様子見てくるわーー。」

「キラリンー。」

「ふふ。いいのよ氣にしないで。」

「でもチョット強引すぎますよな。」

「それがあの子のいいトロなのよ、憲吾とは小学から一緒に家も近くでよく遊んでたみたいだし。」

「へえ～。なんか意外ですよね。」

「あなたは煌ちゃんのお友達よね。」

「はい、そうです。」

「名前は何て呼んだらいいかな?」

「中谷若菜…なんで」

「若菜ちゃんね、かわいいわ。気に入つたわよ。」

「いやいや全然ですよ。」

「かわいいんだから自信持ちなさいよ…」

「無理です。」

「あの子超シャイだから女の子の友達なんかいないと思ったの…だからホントお母さんがビックリしちゃつた…」

「フツーに沢山いますって。無口だけビクールだからひそかに人気がある。」

「ホントにあの子をよろしくお願ひしますね、若菜ちゃん。」

笑つしかなかつた。

そして

「若菜こいつー部屋座るとこまできたから。」

私はお母さんと顔を見合わせて笑つた。

「わあ行きましょ。」

ホントにテキトーな家庭だよね。

このテキトー加減が逆にいいけど。

「憲吾開けなれど。」

「もー。メンドクセーなあ。」

ガチャツ。

扉は開かれた。

「お茶とお菓子持つてきただから。」

「なんでコラップ3つー?」

「若菜ちゃんこむるのよ。」

ドキッ。

「じゃーんーー連れできちやつた。」

バタン。

「何で?俺聞いてねえぞ。」

「開けなさいよーー!」

扉の影からケンちゃんの顔が私を覗いた。

「えむ。」

「ねえ。」

「変なーー。」

「てかオマエに会つんだったら全然問題ねーけど…公用の身體みじ
やねえんですかど、俺。」

「まあ、いいじゃん入っちゃえー。」

「うふふ…。」

思つたよつと云くて綺麗だった。

てこつか私の部屋より綺麗なんかも。

「綺麗に片付けてやんー。」

「てか俺キレイ好きなのー。」

「嘘ばつか。」

「まあ、ここけど憲吾?。」

「あ？」

「せつかく来てくれたんだし仲良くな。

「まー、まこねー。」

「だるー。」

私はキラコンの隣に座った。

皿の端には誰もいなくなったり、ケンちゃんがベットの上で寝転んでた。

「まー。」

「まー。」

「ビッククリ大作戦！」

「どうもしねーよ。」

「ウソシキ。」

「オメージル。」

「ていうか私帰るわ、バイトあるし。ハナシ終わったし。」

「じゃあ私も帰るー！」

「若菜はまだ話終わってないでしょ？」

「でもキラリン帰るし。」

「ていうかケンゴが話したいんだって。」

「ああ…。」

「若菜、念のため靴置いとくからー。」

「なんで？」

「まー、あとは若こお一人で...Hロコ」とすんなよケンゴー。」

「んな馬鹿じやねーよ。」

「顔が熱い。」

「ホントにしつづけの。」

「ま、襲われたら連絡して ただじやおかねーから。じゃーねー。」

パタン。

行しあやつた。

沈黙が続いた。

何から話せばいいのかわからない。

今は何もわからない。

頭ん中がパニッててる。

誰か助けて…。

「ねえ…。」

ケンちゃんの声でよみがへり沈黙が破られた。

「なに…？」

「守ってやれなくて」めん。「

私の目から涙が流れ落ちた。

暫く言葉が出なかつた。

だなび私は沢山のねめどいつもありがとうがこいたいんだ。

ケンサヤんだけに、言いたい言葉なんだ。

「「」ねんね。」

「え？」

「黙つててゴメンネ。」

「気にしねーよ。辛いキモチは一緒だから。お互い様だよ。」

「うん...。」

「だけど…これからは辛いことあつたら必ず言えよな、俺頼りにはなんないけど、まあ…頼つてほしい。」

「ねちやねちや嬉しいよ。」

「おー泣くなあ……。」

私の頭をおもいつきり撫でてくれた。

なんか中一の時を思い出した。

「私、幸せなんだから。」

「なんで？」

「好きな人が隣にいるから。」

「なんならそー、俺も同じだよ。」

抱きしめられて、初めてケンちゃんとキスした。

いい匂いがした。

涙が溢れた。

ケンちゃんの手温かかった。

久々にみつけた安心できる場所。

「大好きだよ。」

私は想いを告げた。

『ていうかさー、ケンゴつていつから横山ケンゴかと思つたし、木村なんかこのガツコいつぱいいるから誰だかわからなかつたけど、そのケンゴは私の幼なじみだよー』

幼なじみ…か。

2年生になつてキラリンは、ケンちゃんの紹介でよつやんと会つた。

そして今も会つてになつた。

「若菜たちより幸せになるからー。」

てこいつが私たちまだ生きていなーよ。

でもキスしちゃつた。

絶対変だよね。

「てこいつが絶対釣り合わないよね。」

そう言ひて毎日は2年経つた。

「ナーリン幸せ?..」

「え? なんで?..」

「こいつも笑ひて楽しそうだから...。」

「セウ? ていつか毎日樂しそじやん!...。若菜は樂しくないの?..?」

「..」

「うーん、ナーリン訳じやないけど。毎日.. 大変過ぎて他のこと考
えらんなこや。」

元々マイナス思考だった私。

プラス思考のキラリンとは正反対。

そしてもう一人、プラス思考のケンちゃんとも。

丁度一週間前かな。

キラリンから一通の手紙が届いた。

中を開けてビックリ！

結婚式の招待状だつて。

しかも、もういつかは結婚するつもり。

ねえ、私たちも… 何も変わらなければキリコンたちみたく結婚してたかな。

それ違ひ」とイッパイあつたけど結構私たちってやつでけるって思つてた。

それつて、ケンちゃんも同じだったかなあ…。

そりやつて思つてたかな?

そんなこともう聞けないけどね。

「キラリンは今も幸せ?」

「うん。 今も昔もチョー幸せ。」

24歳のキラリン。

スゴクスゴク笑顔が輝いているよ。

「インターハイいつから?」

「えっとねえ、夏休み入つてからだよ。」

私は、弓道部の主将であり目前に最後の大会を残してた。

「じゃあ補題出れないね。」

「え？ か木村くん出るの？ ひつあつ就職組かと思つてた - - - ！」

「ちよつと一矢の馬鹿にならへくれる？ ？」

「「あん… じゃあ聞くナビゲーの大学行くの？ 」

「一応地元の国立-」

「く？ せんな… 無理でしょーーー。」

「もう推薦確定したし。」

「十九…。」

「若菜は…？」

私は結局、ケンちゃんと同じ大学の推薦を貰つて一人とも合格した。

「ああ…私、私立かな。多分一般だけどね。」

インハイ終わつてから死に物狂いでセンター試験対策したのに、推薦で受かつたからあまり意味がなかつた。

「馬鹿だよな。」

「ていうか奇跡だね！」

「神様何か間違えたんじゃないの？」

「嘘じやないもん！！しかも私、一緒に大学じやん！！！ホントは嬉しいんでしょー！」

「嬉しいねーよーーーーー！」

私はメチャメチャ嬉しかったからね。

でも恥ずかしくて言えなかつたよ、そんなこと。

まあ、お互いシャイってことで！

進路が決まってから私はバイトを始めた。

家出する資金だ。

みんなは私に変わったね、って言つてたけど私はその言葉の意味がわからなかつた。

みんなはそれぞれに夢とか目標持つてそれにむかって田を輝かせながらがんばってる。

けど、私ってそういうの全くなかつた。

ある日、

「わ・何これ！？」

私は、あまりの感動に感嘆してしまつた。

「ええ、ああ……これは設計図だよ。」

「何の？」

「家かなあ……。」

「誰が暮らすの。」

「わあ……。誰も暮らさないところじゃね？」

「なーんだ。」

「じゃあ一緒に暮らすか、ナゾ。」

「私たち2人が??」

「いや、もうだだじ。俺たちと……俺たちの同窓会ナゾもと……つまり家族ができたからー。」

「えー……？……そりゃれいにじょんー。名案だよー。」

ビックリした。

ケンちゃんからこんな言葉が出てくるなんて思わなかつたから。

心臓止まるかと思った。

本気で。

あの時は早と遅つてたから。

絶対叶いつと想つたから。

だから……。

「どうせなら実現不可能の設計にしておうめ……これまへりつてこじまじれで……」

「ひょしき……オマエ向すんだよ……」

「怒りなこの、せつ……」

『たとえこれから先、一人が離ればなれになつてもこの家をみつけた時それを口実に会えるかもしれないしね。』

約束したのにね。

神様はホントに意地悪だよね。

「木村くんの夢は何?」

「建築士かな。」

「へえ〜。」

「中谷さんは?/?/?」

「教師かな?」。

「頑張れ！」

「何よそれ…」

ホントはモット

私の夢は身近で現実的で、だけど今思つと一番遠くて叶へにくくなつて…そう思つた。

あの時、おばあちゃんになるまで一緒に居たいなんてこつこつ…。
なんか変わつてたのかな。

18歳の私にはわからなかつたことだからしかたないけど。

「ていうかさ…俺らまだ付き合ってなかつたっけ。」

「そうだけ…。でも付き合い始める日はキチント決めたいよね。じやないと記念日とか計算できなーじやない。もし付き合つとして。」

「

「いや… できるishよ。とか今日から付き合つ? イース・ナー、答えて。」

「まだ言わない。もつたいないから。」

「まーでも俺知ってるから、中谷さんの答え。」

「期待してると反対だったり」めんねー。」

私たちが正式に付き合い始めたのは3月1日。

卒業式の日正式呼び出してあの時の答えを伝えた。

「ああ、あのときの答えを聞いつか?」

「イエスに決まってるじゃない。」

私の左手にはケンちゃんの第一ボダンが握られていた。

半年以上も前に予約しといたもんね

確實だよーー

「俺、あげる人いないしな。若菜べらこしか。」

「えッ、ああ……。」

「わうお母っこ呼び捨てことやーなんかめんどうへくなつてきた。」

「

「じゃあ……ケンちゃんつて呼ぶから。」

「呼び捨てじゃねーけど、若菜だから許す。」

こんな思い出も全部泡になつて流れてしまえばいいのに。

「どうしてこんなときに私は、失くしてたボタンをみつけてしまったんだらう。」

ねえ？

どうして？？？

[写真の中のあなたは笑つてゐるが、どうして私は悲しいのかなあ。

なんでこんなに涙が出るんだらう。

なんでこんなに悲しいの。

6年前の春、私たちは地元の国立大に入学した。

ケンちゃんは理学部、私は教育学部に入った。

ケンちゃんは昼間、私は夜間の学科だった。

「私、2年まで一緒に勉強できると思ってたのに…。」

手続きの書類を見てガクリと肩を落とした。

「まあ、しょうがないんじやん。学部違うし。それに…。」

「それに何…？」

「いいや、何でもない。気にするな。」

続々と「へきになつてたけど……結局わからなかつたな。

最後まで。

「2年まではみんな一緒に勉強できるつて……なのに私だけハミゴじやん。」

「だからじつは学部にへきやまかつたのにな。」

「頭がついてけないよ。でも教育系の専門は極めれるし、それでいいのよ。」

「訳わかんねー。」

「私の気持ちわかんないくせこ……こ……」

「は？」

「全学部の人が同じ校舎で勉強するんだよ。だからね…。」

「バーガ。俺は言つとくけど若菜一筋だからな。絶対誰にも渡さないし、一生守り抜くからな。」

「はは。ヤツバ、ケンちゃんは世界一だよ。」

もし絶世の美女がやつてきて誘惑したら？

もし理想そのものの相手が現れたら？

もし私以外の誰かを好きになってしまったら？

いろんな不安が浮かんできたけど、ヤツパリ私は信じたよ。

ケンちゃんは私だけをみてってくれる。

そう信じたよ。

「俺ホント、モテねえから気にするな。むしろ若菜こそ気につけ。」

「私は大丈夫。そんな物好きいないから。」

「モツト自信持てよな。」

24歳、モテ期到来の年に大した恋愛ハプニングもなく忙しく一年が過ぎていった。

てこうか君がいない世界じゃ恋愛なんかできない。

サークルは同じトースにした。

「私たちは中学に部活で軟式を経験してた」ともあって、技術の飲み込みも早かった。

「私、県大行ったことあるのよー！」

「何で高校でせんかったん？」

「だつてあんま好きじゃなかつたし。」

「しかし…なんで『道なんか始めたんかねえ。』

「いいのあつたでしょ、モットいいの。」

「帰宅部とか？」

「そんなん…まあ、素晴らしいわねえ。だけども、ある意味で。」

「例えば？」

「バスケとか…楽しいじゃん。」

「バスケとバレーが一番嫌いよ、運動の中で。」

「分かつてないよな。」

「それはできたら楽しいけど…私は無理だし。」

「俺は弓道なんか嫌いよ。」

「なんで…？」

「だって、中学の時に俺の嫌いな先輩が決勝点とつて優勝して、テレビ映つてたもん」

「…優勝とかスゴイじゃん。」

「だから…正直、県予選で若菜が優勝した時は力づつて氣分悪かったし。」

「もし弓道のサークルに誘われたいひつじょうひつて思つたでしよう。

」

「うん…。」

県予選の日、来てくれるなんておもつてもなかつた。何年も前の話だけどね。

前日にメールして冗談で応援来てよ、って

送つたらホントに来てくれたし。

嬉しかつた。

決勝まで残つたけど、体力と集中力がもたなくつたダメだと思つてた。

だけど、そんなとき

『がんばれーー!』

つて誰かの声が聞こえてきた。

その誰かはケンちゃんだったよ。

ホントに嬉しかった。

だけどもつ今は…。

悲しいだけだから。

応援してくれない武道館に立つのは苦しいから。

わが、全て終わったよ。

君との思い出は全て切り離さなければならぬ。

もう何も残っちゃいけないんだ。

これ以上傷つくなき氣もない。

「あの…中谷若菜さん?」

「はい…。」

「私、2回生の…小泉愛子とこいつなんですかビ…サークルニアスよね?」

この出会いが私の全てを壊した。

この人に出逢わなければ私は幸せになれたのかもしれない、何度も
そう考えた。

しかし…違う。

私は最初から幸せにはなれなかつたんだ。

「来月の春季大会ダブルスで出でくれない?」

「えー?」

「無理には言わないのでよかつたら考へといてね。」

「ええ…私は全然構わないんですけど、先輩が本当にそれでいいなら。」

「じゃあ決まりね!」

最初はわからなかつた。

田的や企みとか、そんなのがあつたかななんて分からなかつた。

だけど…。

「やつやんの考へてることが全く分からなかつた。

「今日もお疲れ様！」

「はー、お疲れですー。」

「やつやんはパートナーとしては最高だわ。」

「いえいえ、足を引つ張るばっかりで。」

「そんなことないわ。キット彼にひとつあなたのポジションも元
璧なハズよね。」

「えー？」

「彼、いるでしょ。」

「ええ、まあ。」

「どうなのー？」

「どうなのって聞かれても…。サークルが同じなだけです。」

「お似合こじやない。ていうか私、彼と同じ学部なのよ。」

「私は、違うんです。」

「どうの学部なの？」

「教育です。」

「センセーになるの？」

「まあ、やうですかね。まあ教員免許はほしいです。」

「そつかあ…。大変だけど、頑張つて。」

「はい、じゃあ私授業があるので。」

日が落ちて真っ暗になつた頃、私の授業は始まる。

『彼と同じ学部なのよ』

その言葉だけが始終、頭の中を巡つて。

開き直つて教科書を開いた。

児童心理学。

なんという眠い授業なんだ。

5時から9時まで一生懸命耐えた。

苦しい。

それからすれ違ひ日々が多くなつて、だけど私たちの関係はずつと続いていた。

「一緒に暮らそうか。」

3回生になつて校舎が離れ、不安な私に彼が提案してくれた。

優しさが心にダイレクトに染み込んだ。

しかしその年の冬、彼に異変が起きた。

何日も帰つてこない日が続き、早く帰つてきたと思ったら自分の部屋に閉じこもつたり、ソファーで眠つていたり。

とにかく疲れきった風だった。

私は相手にしてもうれない」とにも腹が立ち家を出て行つた。

ちゅうじゅの田は記念田の前の田で悪にタイミングでケンちゃんにはちあわせた。

しかもケンちゃんの横にいたのは愛子さんだった。

私は感情が麻痺してなにも言えなかつた。

泣きながら大嫌いって叫んでその場から去つたんだっけ。

だけどその後、愛子さんから電話があつて誤解だつたつて知った。

「健吾くんは、若菜ちゃんにあげるプレゼントを買うために一生懸命働いてたの。それで昨日は何をあげたらいいか分からなかつて買い物に付き合つてあげてただけ。」

涙が次々と溢れ出した。

ホントは知つてた。

愛子さんが、ケンちゃんのこと好きだつたことも。

サークル終わつて私の授業が始まる頃に一緒に帰つてたこと。

校舎が一緒になつてから行動を共にするよつになつてたことも。

愛子さんが大学院に進んだ理由も。

全部見ていた訳じゃないけど知つてた。

だけど、私はこんなになつてもケンちゃんのことを信じていた。

大好きだつたし。

絶対に失いたくなつたから。

だけど愛子さんは勝てない理由があった。

だつて約束したもんね。

私たち一緒になろうつて。

必ず結婚するんだよって。

最初の子どもの名前は万里バンリだってね。
万里の頂城のバンリだよ。

それでケンちゃんが設計した家にミンナで住むんだったよね。

約束したじゃん。

神様なんて大嫌い。

『建築士の試験もつすぐなんだ。』

そういうて私たちの間に境界線引いたのは君。

置いていかないでよ。

独りぼっちは嫌よ。

寂しいよ。

私も資格試験の勉強を始めた。

あの時、二人は完全に孤立していた。

そして君は、誰かのものになろうとした。

私の体に包まれたって冷たいだけだもんね。

愛なんか凍りついてた。

錆び付いてしまってた。

愛なんか要らないよ。

君はあの書斎に1ヶ月不在だった。

1ヶ月後、君は帰ってきた。

私の口からは自然に
「別れよ」
つて言葉が出てきた。

君は静かに頷いて私は家を再び飛び出した。

不在の間に何があったかは知らない。

だけど、何らかの形で愛子さんが闇^ハしていたと予想はしていた。

それが最も悪い形で結び付いてたなんて。

そんなこと。

「私、病気なの。」

「えー？」

「実はエイズだったの。」

私は、動脈が一気にドクドク鳴つて流れ出る瞬間を感じた。

「本当…ですか？」

唾を飲み込んだ。

「ええ… 本当よ。」

冷静に答えるといひでますます恐怖感を助長せられた。

しかし、それと私に何の関係があるといつのか。

「でも……私には何もできません。知識だけでは直せない病気だし。」

「違うの……私、私！！！取り返しのつかないことをあなたにしてしまったの。」

「だから……一体何なんですか？」

「私は……」

聞こえないフリをしたかった。

あの言葉だけ、あの瞬間だけ切り取つて全部嘘に変えてしまったかつた。

世の中は嘘ばっかなのに、こんな時に限つて無意味な真実が人を狂わすから。

あの時のこと、覚えてないよ。

世の中つていろんなことが存在するんだね。

知らなかつた。

私は泣きながら君に電話したよね。

私が謝ると君は優しい声で『大丈夫だよ』って囁いたよね。

何があつてもケンちゃんは世界一だよ。

何があつてもケンちゃんの」と愛し続けるからね。

約束したじゃん、つて左の薬指のループが二つも光るんだよね。

離れている間も手放さなかつた。

いつも身につけていた。

だつて別れるわけないつて思つたもん。

絶対に別れないと信じてたから。

ケンちゃんが変わつてしまつても、誰かのものになつても、汚れて
いても私はケンちゃんの全てを好きでいる。

だつて嫌いなどがないから好きになつたんぢやない。

そんな人、世界中探しでもビリにも見つからなによ。

多分、ケンちゃんはわからないかもしれないけどケンちゃんは私の運命の人なんだって。

錯覚でもいい、そう思いたい。

私は家に帰りケンちゃんの姿を探した。

涙で視界がぐにゃぐにゃだつたけど、風を感じた瞬間私は何か大きくて温かいものに強く抱きしめられた気がした。

「おかえり」

耳元で囁いた君の声は震えてた。

「ただいま」

君は、冷たい手のひらを私の頬に当て激しいキスをした。

当たられた手が、腕^{うで}と首に絡まり私は壁に押せつけられながらキスをされていた。

舌が口の中を旋回し私の舌に絡まつ合^{あわ}つ。

放した唇からは糸を引いた。

ケンちゃんの唇が首に触れた時私は思いきり君の体を炎^{ほの}飛ばした。

「若菜ー? ?」

「…ダメなの。」

自分を防衛するためじゃない。

ケンちゃんのためをおもつて。

お互いに傷を作りたくないから。

「どうして俺じゃダメなの……？」

「違つて……？」

「嫌いになつてしまつたのか！？」

「だから違つて……」

私は腰を落とし彼の体にもたれかかった。

ケンちゃんは腰を降ろして私の肩を取った。

「い」めさん。

「今夜はいつしていいたいの。」

壁にもたれかかり彼に肩を抱かれた形で眠りに就いた。

真っ暗で何もみえない。

だけど、ケンちゃんが隣にいることが唯一の光りだった。

「帰つてきてくれてよかつた。」

「だつてかえる場所ないもん。」

ホントはいつだって側にいたかった。

1秒も離れたくなかつた。

HIV

Human Immunodeficiency Virus

エイチ・アイ・ブイ

ヒト免疫不全ウイルス。

AIDS

Acquired Immunodeficiency Syndrome

エイズ

後天性免疫不全症候群

HIVに感染すると

急性期症状（初期症状）

としてインフルエンザのような症状が出る事がある

(全く出ない人もいる)

その後、通常で数年～十数年（平均で10年）は 何の症状もない。

この時期を

無症候期

といつ。

そして

体内のウイルス量が増え

免疫力（CD4の値）が

低下すると、

健康な人は全く感染しないような通常の空気中に存在するさまざま
な病原菌で日和見感染症を発症する。

23種類の感染症のいずれかを発症すると

エイズ発症と認定される。

もう引き返せないんだね。

戻れないんだね。

これが運命なんだよね。

ソファーですやすやと眠るケンちゃんを見て涙が溢れた。

今はまだ受け止められないかもしねない。

もしかしたらケンちゃんの体は大丈夫なのかもしれない。

私たちは無関係に生きていけるのかもしない。

そう思つてたけど。

ふたりが再び一緒に暮らしされて数日がたつた。

あの日を契機に私は変わった。

ケンちゃんを見るだけで押し潰されそうな気持ちに駆られたけれどどうか気を強くもち、明るく振る舞おうと決意した。

見えないとこひでは沢山泣いた。

とても不安だった。

気持ちちは行動とは裏腹に後ろ向きだった。

先走る感情には歯止めが効かなかつた。

ホントは恐かつた。

「ねえ、ケンちゃんドッカ行きたいとこりある?」

私が問い合わせるといつも以上に人懐っこい目で私を見てきた。

メンドーだと言わず、素直に人の話を聞き入れてくれる彼を以前と違つて異質的に思い、嬉しい半面心は悲しさで充満した。

私が変わったのか?

それともケンちゃんが変わったの？

前はモット頑固で、めんどくさがりだったのにね。

今は世よつモット優しい。

穏やかになつたね。

「海行」つい一

これが最後だなんて思つてもしなかつた。

一番最後に見る海の姿だと予想もしなかつた。

永遠に一緒にいたいと想つた。

「おとと廻を並べて語り合はると想つた。

なの...。

「ねえ、ケンちゃん...」

「ん?...」

「どうして海なんか来たいと想つたの?」

潮騒が耳の奥で流れる。

「好きな場所だから。」

「そうなんだ。今まで一回も一緒に来たことないのにね。」

高校時代、短かった私の髪はもつ肩のところまで伸びていた。

風がふくたびなびき、ケンちゃんの頬に当たる。

「俺はこつもきてたよ。」

「なんで?」

「親父たちに会いに……かな。」

「お父さん、いないんだっけ？？」

「ていうか何年も前に死んだよ。」

「そんなこと聞いてないよ。」

「だつて言つてないからな。」

「やつだけど……。」

「母親いるけど、本当に母親じゃないしさ。」

「え……。」

「こつ打ち明けるべきか考えてたけど、時期逃して結局今日まで呑みすりてしまつたんだよな。」

「それ……私に言つてよかつたの？？」

「なんで……？」

「ううん……でも何か、私ね……。」

「だつて俺ら結婚するだろ? で、あの不可能の家にミンナで住むだろ? そん時家族できるでしょ。俺はミンナを幸せにしたいんだ。」

「うそ。」

「何泣いてるんだよーー!」

「だつて嬉しいもん。」

未来なんかないって思つてた。

明日なんかこないって思つてた。

だけど今は未来なんか見えなくてもいい。

明るい未来だけ思い描いていればいい。

だって私たちは幸せになれるから。

「俺と若菜は同じだよ。」

「じつじつ。」

「俺だけは出逢つまで本当の愛の意味を知らなかつたんじゃないかな？」

「愛の意味？」

「俺、若菜に出逢つて変われたよ。」

こんな笑顔初めてみた。

今まで見てきたどんなものよりも美しいサイコーラの笑顔だった。

初めて会った時、ケンちゃんにほじこが影があったのに見えた。

『笑えない』

こつも口癖のみで言つたよ。

一見クールに見えて、すこしへ傷つきやすい心を持つてたり、笑顔が可愛かつたり。

時間が様々な発見を促してくれた。

だけど今日初めて聞いた、海のこと。

この海の底にケンちゃんのお父さんが眠つてゐるんだよ。

「親父さ、カツコいいよ。だって……誰かのために犠牲になるって、本気でかつこことと思つ。」

「うそ。」

海上保安庁。

すべて命懸け。

「でもな俺は、親父の夢を叶えるために生かされてるんだ。……だからまだ死ねねえよ。生きてたいんだよ！」

「ケンちゃん……。」

「もう一つ告白する、俺…病氣なんだ。もう治せねえんだ。本当に『めぐ。許してくれ。』

「知つてたよ。」

私の目からまほりとつぶたつと涙が流れ落ちた。

視界が次第にぼやけてケンちゃんの顔も見えなくなつた。

「もつ…何も言わなくていいからただ聞いてくれ。」

私は「クニと頷いた。

「親父の夢は、建築士だった。だけど、親から海上保安官になる」

とを強いられてやむを得ずその仕事に就いたんだ。」

「そしてこの海で親父たちは出逢つて恋に落ち、結婚した。そして何年か経つて俺とにいちゃんとなーちゃんが順番に生まれた。」

「親父と一緒に最後に来た時は俺が5歳だったかな。今でも鮮明に覚えてる。言葉の破片のひとつひとつも全て。」

「その時、約束したんだ。いつかこの場所に俺が家を建てるからって。親父の意志を受け継いようと決意した。」

「その1週間後、遠征先の海で不幸にも船が転覆して親父は帰えらぬ人となった。その1ヶ月後に母親は俺ら兄弟を捨てて逃げた。現実から逃げたんだ。」

「それで今の母親に拾われたの。一番最初にできた友達はあの煌ちゃんだったよ。」

「こんな」とここあつたけど、結果的に今幸せだからここのかなつて思うよ。」

「出逢えてよかったです。若菜……俺と出逢ってくれて本当あつがう。」

「そんな」と少しひにかわしがなこでしょ……。

泣こわやわじかん。

「一人で暮…叶えよつて…来年も再来年もまたここに来よつむ。こつ
か家族でここに暮らしあつむ。」

「俺…意外とチョー長生きしちゃうんだだよ。」

だつてまだまだ死ねないじゃん。

秋も中盤に差し掛かった頃、私たちとは子供のことでいつも考えていた。

ケンちゃんが薬あと5年キッチリ生きられるとしても私たち2人だけじゃ家族とは言えない。

やつぱり結婚するからには子供もがほしい。

とつあえず今は大学を休学して子作りに専念することにした。

時間は無限じゃないといつ意識が高まりやや私たちの中にも焦りの色が見え始めた。

「体外受精なら可能ですよ。」

その言葉にどれほど救われたか。

私は資金を貯めるために一生懸命働いた。

ケンちゃんも働きながら仕事と勉強の両立してた。

そしてお互いの未来のことを考え治療に進んで取り掛かっていた。

一緒にいる時間が増えた。

幸せを感じる瞬間が増えた。

大切な人が側にいる。

それ以上に幸せなことってないだろ？。

私って世界一幸せなのかもって思った。

「絶対生まれて来いよ。俺たちの夢叶えるんだぞ。待ってるからな。

」

ケンちゃんは私のお腹を優しく摩つてた。

いつもひて望まれて生まれてくる赤ちゃんは本当に幸せだよね。

安定した日々が続き、冬が始まりかけた頃

予期せぬ出来事が私たちの耳に届いた。

「愛子さん…入院したって。」

あれから何ヶ用経つただろう。

自分たちのことで慌てている間に周りではいろいろなことが起きていたみたいだ。

久々に大学の先輩に会って話すと半年程前から愛子さんは体調を崩し入退院を繰り返していたところ。

病院には頻繁に通っていたが原因はわからなかつたところ。

大事な研究調査のチームからもといつ外されてしまい、大学院での存続も危ういらしく。

そしてとうとう口前、愛子さんは倒れてしまい昏睡状態らしい。

「本当……？」

「うん……だけど、私一応行ってみる。」

「行く必要ないよ。」

「とにかくケンちゃんは家に居て！ いつ帰つてくるかわらないから、時間になつたら薬チャント飲むのよー。」

バタン。

ドアを閉める音がいつもより寂しく心に鳴り響いた。

ケンちゃんの存在が一気に遠のいたようで恐くなつた。

失いたくないよ。

恐いよ。

病院に着いて、ガラスの窓の先に眠る人の姿を見て私は愕然とした。

「そんな……。」

目を擦り、頬を抓り現実か夢か何度も確認したけど、目の前にあるものは夢でも幻想でもなく紛れもない現実だった。

病室のドアには小泉愛子と銘記されていた。

「面会ですか？」

看護士に背後から問い掛けられた。

「あ……はい。」

「じゃあ、どうぞお入り下さい。」

「失礼します。」

「入室の際には毎回白衣を身につけ、入口の蛇口でうがい手洗いを行つた後マスクをして奥の扉を開けて入つて下さい。」

初めて入つた無菌室。

生暖かい空気が流れる。

「室内での」飲食は禁止されているので」仮をつかないで。」

「あ…あの。今はどうこの状態なんですか？」

「一昨日に激しい肺炎の発作を起こし、意識も昏睡し非常に危険な状況です。人工呼吸器のお陰で生き延びているとしても間違えではないです。」

「よくなつますか…。」

「全く私たちも見当がつきません。」

「わづですか…じゃあ良くならなことも考えられるわけですね。」

「だけど、助かる見込みがないとは限りません。希望を持つて下さい。」

「そんな…エイズ患者はみんな」んな風になつてしまつんですか？」

これが最期の姿なんですか？？

「この人の場合、発症したにも関わらず治療をろくにせず薬も飲んでなかつたみたいですね。何か相当無理されてたようで栄養失調や他の病気も併発してたので。」

「…それに血液からは覚醒剤の成分が検出されましたし。かなり追い込まれてたんでしょう。しかしHIVは治療をしつかり行えば、寿命を延ばせる病気なんで大丈夫です。」

嘘つぽく聞こえた。

説得力がなかつた。

「でもこの人の体は…。」

完全に病に蝕まっていた。

やがて田が暮れて窓の外に闇が訪れた。

ガチャ。

扉が開いたのでいそいで振り返るとそこには一人の男性が立っていた。

「中谷若菜さん？」

「はい、そうですけど。」

私は初対面の見ず知らずの男と暫く話していた。

その人は愛子さんの元カレだった。

昔、愛子さんはいふなことを語つてた。

『愛つて体で確かめ合つてのじやなくして心で取扱ふるものなのよね。

』

あの時の愛子さんは幸せそうに見えた。

セックスには愛なんか要らない。

田の前にいる男は堂々と口にした。

「俺なんです……俺が病氣を愛子に染したんです。」

「え……」

事情は一番最後に大学で愛子さんに会った時に聞いていたので知っていた。

まさかこの人だつたなんて……。

「俺、ドラッグやつてるんです。もう辞めますけど……。」

「聞きました。あなたのことば全て聞きました。」

細身の長身で端正な顔立ちをした眼鏡がよく似合ひ誠実そつな男性
だった。

上手くスーツを着こなし、真面目なサラリーマンといった風格を感じられた。

「大手の株式会社に所属しています。昨年、課長に昇進しました。」

「お若いの……。」

「愛子とは大学の同期で学部は違つたけれど、何年も前から付き合つてました。本当に僕は愛子を愛してたし、愛子も僕のことを愛してくれました。」

「やはり仕事が原因ですか?」

「そうですね……昇格するにつれ周りからの圧力は高まるし、跳ね返りや反発の力が半端じゃなかつた。」

「気の休まるところもありませんよね」

「元々不良メンバーとつるんでいたこともあって薬は簡単に入手することができました。」

「愛子さんにも薬打つてたんですね?」

「気持ちよくなつたついでに…ヤッちゃんた。」

「人間つて…」

「はい?」

「バカな生き物ですよね。」

「どうしたんです?」

「分かつてても同じこと何回も繰り返して、失敗したり失つたりしないとそのものの価値っていうか本質を見抜けないっていいますか…。」

「私の周りに3人もの不治の病を持つた人がいる。」

「僕もようやくそれに気付きました。」

「何故あなたが生き延びるのですか?」

「わかりません。」

「無責任すぎはじませんか？」

「わうですよね…。」

「あなたを含め3人が同じ病氣にかかっているのに…最後に残るのがあなたなんてそんな理不尽なこと。」

「あなたの彼は愛子と関係を持つてたんですね。」

「どれもこれも私のせいなんです…。」

「いいえ、僕が悪かつた。大切な人と全く関係のない他人までも傷つけてしまうなんて…。」

「あんまつ…責めないで下さい。」

「愛子からあなたとあなたの彼のことについて改めて自分の罪の重さを実感しました。これからどうやって償いをすれば。」

「では、約束しましょう。これからあなたは永遠に愛子を離して続けてください。明日が終わる日の直前までですよ。」

「そんなことでは私の罪ではない。」

「彼女をありのままに處する、それがあなたができる最後の償いで
す。愛子さんはそれを望んでいますよ。」

「きっと僕を恨んでいると思ってます。」

「いいえ、だつて彼女言つてましたもん。別れたけどずっと好きだ
し、会れたことなんか一度もないつて。それだけ愛されてるって幸
せですよね。」

「愛子は幸せだったのかな。。。」

「もつと幸せでしたよ。」

倒れる前日まで薬物依存症の彼のためのお金を確保するために必死

に働いていた。

彼の家に行くと薬漬けにされ愛子さんは彼のおもちゃにされていた。

体中には無数の傷やあざが擦り込まれていた。

痩せ細った腕にはいくつもの注射針の跡があった。

これも全て生きた証。

彼を愛した証。

彼女は本当に幸せだったんだろう。

「抵抗したのに、憲吾くんは私を押さえつけたまま…。」

「なんでそんなこと…。」

「ムシャクシャしてたって…言つて。」

やつ、それは私のせいなんだ。

ひとつになれるならだれでもいいんだ、って一瞬思つてしまつた。

だけど、ケンちゃんをしつこつ『気持ち』にさせたのは私。

ケンちゃんを傷つけたのも私。

意外と私が一番被害を多く『え』たのかも知れないね。

「元カレ…のこと大好きなんだけど、ヤクやってて多分病気なんだ。

」

「久々に会つたけど、ヤツパリ薬漬けにされてメチャクチャになつた。たとえ愛がなくても私は抱かれた喜びの方が大きかつたかな。」

本当に愛してたんだね。

『「めんね、若菜ちゃん。』

明け方、午前4時。

だけでもう私は愛子さんを恨みません。

「生まれ変わつてもまた彼に会いたいな。」

愛子さん！？

愛子ちゃんは永遠の罪に陥つた。

愛子ちゃんの彼女

『生まれ変わつたらまた愛子に会いたいな』

と言つて残して後を追つよつて1週間後に自殺した。

ケンちゃんが知らない間にいろいろなことがあったよ。

だけど、ケンちゃんは知らない方がいい。

「歯科医院」へなつたつて本音…？

「本音…。」

「やつせつや、俺たち一緒にいのべをじやないよ。別れよ。」

「私たちには本当に別れた。

私はその後、出産をし子育てに専念した。

別れた直後に妊娠が発覚したので報告もしないまま産んでしまった。

もちろんその子には

「万里」

（ばんり）とつけた。

男の子だった。

それから2年が経ったけど彼がどこで何をしているのかなんてわからなかつた。

約束の海にも行つたし、あの時の設計図じこ家を何度も探しに行つた。

だけど彼はどこにもいない。

以前同棲していたマンションはもぬけの殻だった。

私は、いちから勉強し直し学校図書館司書教諭の免許を取ることにした。

大学にも復学した。

充実しそぎた毎日ケンちゃんの存在は次第に薄れて行つた。

しかし、資格試験の3日前に電話があつた。

彼から

「もう生きられないかもしない

つて。電話があつた。

私はビックリして受話器を置いた。

急いで病院へ向かつた。

途中の新幹線の中でいろいろなことを考えてた。

彼との思い出。

9年前、初めて出会った日。

付き合い始めた日。

時が流れても変わらなかつたこと、あなたを愛する気持ち。

だつてホラ。

今も薬指にはあの時の指輪がはめられてるから。

一生懸命働いて買つてくれたシルバーリング。

一生の宝物だね。

「若菜。」

「うふ。」

「万…里。」

『約束果たせなくて』めんな。

「こつぱこ傷つかで」めん。

「手ひこねがねへじ」めぐ。

「ホントはもうじゅうと一緒にいたかった。」

「だけど、俺…若菜に会えてホントによかった。幸せだった。」

「出会えてよかったです。チョー幸せだよ俺。」

そして彼は24年の生涯を終えた。

私は後を追うわけにはいけない。

守るべきもの、大切な命があるから。

セシルケンぢやんとの約束果たすから。

まだまだ死ねないよ。

何年か振り地元に帰つた。

ママになつて帰つてきた。

家にいるといつべこべ親に言われるので気分転換に外に出る」とい

た。

「今日は夫の命日なの。」

「何で帰つてきたの?」

「アハ。お母さんになつたのー。」

「あれ? 予ども?」

「おー! 久しぶり! 元氣にしてた?」

「うん。まあまあね。」

「あー、じゅーくんー!」

「…………。」

「やっぱ、私なんだかんだ言つてこの町好きだわ。」

「やうなん…。」

「りゅーくんさあ、友達に大工いない?私建築士を目指してるので。だから…。」

「はあー…?」

毎日「いろんな」とあるけど、いろんな人に出会ひけじ、どの瞬間にも無駄なことなんてひとつもなくて。

生きてるから泣く。

生きてるから笑う。

生きてるから人を愛する。

生きてるから誰かに出会い。

そんな単純なことだけど、どれも全てにおいて意味があつて……その
単純なことがいつかすく幸せいに感じるんだよね。

私変わったよ。

ケンちゃんに出会って変わったよ。

人って愛されるより愛することの方が幸せなんだね。

私は生きていくよ。

あなたのために。

私のために。

バンリのために。

いつかあの海に約束の家を建てます。

セレジーと一緒に暮らさう。

いつかまた会いましょう。

「バンリ～！あのね兄ちゃんにバイバイつてー！」

『バイバイ～！』

若菜へ

この手紙を若菜が読むころには、もう俺はこの世に存在しないだろう。

本当に今までごめんな。俺と離れた間に幸せになつてくれたらいいなつてずっと考えてた。

俺は、若菜と別れてから一週間後に家を出た。

あの時行つた海の近くに住んだり、実家に帰つたり、点々としてた。

時々若菜に会いに行つたりもした。

だけある時、俺は驚くべき真実に遭遇した。

若菜に子どもがいたこと。

それって

「万里」

のことなのがなあって。ていうかそうだって信じていよね？

それから一生懸命働いたから、そのお金使って欲しい。養育費払えなくて本当にごめん。父親のくせにな。情けねえな。

でも父親になつたとかメチャクチャ嬉しいんですけどーーーすげー嬉しい！

今すぐあつて抱きしめたい。俺らの子どもチョーかわいいだろ?なあ。

それから報告がもう一つ。2級建築士になれましたーあの家建てるには1級の資格はいるしもう一年勉強しなくちゃなあ。

もつひとつ生きてられたよかつたのに。

生きていえよ。

なんか悔しいな。

俺からの遺言なんだけど、俺があげた指輪ペアリングだったんだ。

気付いたかわからないけど、後ろに字が彫られて俺の指輪とくつつけたら一つのメッセージになるの。

俺、痩せたから指にはまらなくなつて、だから首からチョーンで指輪をぶら下げる。

いつか俺が死んだらそれを形見としてバンリにあげてほしいんだ。

それと俺が骨になつたら、骨を粉にして若菜の町の一一番景色のいい場所に撒いてほしい。

それと親父の死んだ海に流してほしい。

俺、本当何もできずに頼むばつかだけど本当にごめん！

だけど今、わがままが叶つなら若菜に会いたい。最後くらい素直に
いふこと聞けよな、神様。

てこうか生まれ変わつてももう一度会えるよな！

もつといい男になつて迎えに行くから必ず待つてろよ！必ず次の人生では幸せにするから待つてろよ。

若菜、愛してる。

出会えてよかつた。

本当にありがとうございました。

憲吾より

「forever love」

Ringに刻まれた来世まで有効のメッセージ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7345a/>

ring

2011年1月19日16時06分発行